作家 渡辺一雄の ごめんやす

大きなお方——納屋嘉治さん

『先輩をたずねて』という三中・山城高校創立百年誌の企画で、淡交社会長室へ納屋嘉治さん（三中34回）を高柳久子（山城14回）、佐藤幸恵（山城56回）がお伺いした。

おいしいお菓子とお茶が出た。

お茶を頂き佐藤が思わず「おいしいですね」と洩らした。

「そうか、おいしいか」

納屋さんが嬉しそうに微笑われた。

大先輩を前に固くなっていた後輩女性の緊張はとけ、あとは和気藹々といった雰囲気の中でインタビューははじまった。

「納屋さんは何年に三中に入られたのです」

「昭和十三年、一九三八年だ。難関を突破し三中に合格した時は飛び上がって喜び、京都府立京都第三中学校と校名を何度も声を限りに叫んだものだ」

「通学はバスを利用されたのですか？」

「バスはまだなかった。小川寺の内の自宅からは市電、嵐電を乗り継いで通わねばならなかったので、母にせがんで自転車を買ってもらい自転車で雨の日も風の日も雪の日も通った。当時自転車通学している者はあまりいなく自転車で通う千とすっかり有名になった」

「千とは？」

「茶道家元千家の二男として私は誕生した。成人してわが家の古いしきたりに従って納屋姓を名乗るようになったが、それまでは千嘉治だったのだ」

「三中は男子校だったのでしょう？」

「そう。府下から秀才が集まって文武両道お互いに研鑽しあったものだ。といってガリ勉揃いではなく自由で伸び伸びした気風が溢れていた。三中の綱領は、誠実、剛健、進取、協同だが、今でもその教えは私のバックボーンとなっている」

「文武両道と申しますと？」

「文は学問、武は剣道、柔道のことだが、スポーツ全般と解釈してもらえばいい。剣道、柔道は正課でどちらかをとら

ねばならなかった。私は柔道をとった。プールがあったため三中は水泳で有名だった。私はラグビー部に属したが、ラグビーも全国大会に出場するなど有名だった。ところで私は今三中には自由な気風が溢れていたといったが、私が入学した翌年くらいから怪しくなった」

「何があったのですか？」

「昭和十四年の新学期から配属将校というのが学校へやってきたのだ」

「配属将校？」

「何年も前から軍事教練を行うことを義務づけられていたが、きちんと定められたとおりに軍事教練を実施しているか、いうならばお目付け役として陸軍が現役将校を配属してきたのだ。この配属将校が軍部の威光をかさに着た傲慢な男で学校の中をサーベルをチャラチャラいわしながら闊歩し何かあると戦時下学徒としてあるまじきことだと威嚇恫喝して廻った。そんな訳で三中はまるで軍人養成所のようになってきた。生まれつき長いものにまかれない私はこの配属将校ににらまれて随分ひどい目にあった」

「昭和十四年以降はそれでは納屋さんにとって、いわゆる暗い青春時代になったのですか？」

「そうではない。三中には教育熱心なすぐれた先生方が一

杯いらっしゃった。それらの先生方が愛情を注いで教育してくださったからその意味では充実した中学生時代が送れた。校長の藤森先生、以下国語の小沢先生、漢文の橋本先生、歴史の楠先生、英語の山村先生、数学の小針先生、体操の国府田先生、柔道の三好先生等々思い出すだけで十本の指に足りない」

そこまで言って納屋さんは、

「面白いものをみせてあげよう」

といって一冊のノートをひらかれた。

二人の後輩が覗き込むと先生方に生徒がつけた仇名の一覧表だった。

「漢文の橋本先生の仇名は聖人だ。鶴のようにやせたお方だったが、ふた言目には掃除せよ、掃除せよとおっしゃった。渡り廊下で学校の建物はつながれていたが、塵ひとつ落ちていなかったので見学にきた人は三中の生徒は本当に躾けが行き届いていると感嘆された。礼儀作法を守ることは人間として一番心得なければならないことだ。橋本先生はその一番大切なことを教えてくださったのだ。英語の山村先生は英語を教えてくださっただけでなく西洋史、特にヨーロッパのすぐれた文化のことを教えてくださった。歴史の楠先生は中国の古代史がご専門のようだったが、中国の黄河の話をよくなさ

った。それまで日本は中国相手に戦っていたが、昭和十六年十二月八日、米英相手に戦争をはじめた。日本中が戦時色一色に塗り潰された。敵国の中国、ヨーロッパの国々のことを評価などすれば軍部ににらまれてどのような目にあうかわからなかった。が、先生方の態度は変わらなかった。相手のことを何も知らず自分が一番えらいのだと自惚れる人間を夜郎自大というが、三中の卒業生でそのようなそしりをうける人間はひとりもいない。先生方の教育の賜と私は有難く思っている。先生方にこのノートにあるように仇名をつけたり、私もそのひとりだったかも知れないが、手に負えない腕白坊主もいた。しかし教室ではみな温和しく真剣に先生方の話に耳を傾けた。予習、復習も欠かさなかった。三尺さがって師の影を踏まずという礼節を私たちは守った。三中の生徒がえらかったのではなく、先生方に徳があったからだ。先生方とのご交誼は卒業後も長くつづき、東京へ移られた山村先生が京都へおみえになった時はいつもお目にかかり昔話に花を咲かせた。文武両道の武の方では人に勝っていたが文の方、特に数学は苦手で、君は本当に数学が出来ないねと小針先生を嘆かせたものだ、小針先生にはよくご自宅に呼ばれ特訓を受けたものだ」

「納屋さんは特別扱いされたのですね？」

「もしえこひいきという意味でその言葉を使ったとしたらそれは誤りだ。私は数学が出来なかったから特訓をうけたが、そうではなく戦争が激しくなり教練だの勤労奉仕などで授業時間が減った。そのため勉強したくても出来なかったので勉強好きの人間が数学を教えてくださいと先生のお宅まで押しかけた。先生はいやな顔もおみせにならず教えてくださった。小針先生だけでなく他の先生もみなご自分の時間をおさきになって教えてくださった。私の同級生の中にも泰斗だの碩学などと世の尊崇を集めている人間が大勢いる。すべてあの苛酷な時代にあって私たちを導いてくださった先生方のおかげだ。ここで私が無期謹慎を命じられた話をしてあげよう」

どのようなお話がきけるかとふたりの後輩は身を乗り出した。

「弱い者を苛めるのは人間として最も卑しいことだ。ある人間が弱い者苛めをしている現場に私は出くわした。それで、よせ！　といったところきかなかったので、私は一発くらわした」

「―」

「その男は眼鏡をかけていたが、眼鏡が割れ瞼が切れ血が吹き出し大騒ぎになった。校内で暴力行為に及ぶことは校則で禁じられていたので私は無期謹慎というお目玉をくったのだ。」

「―」

「謹慎は五日で解けた。学校の規則を破るなどしてはいけません、ご先祖、千利休さんの祠の前で反省しなさいと母にいわれ私は毎日数時間反省し、二度と校則破りはしませんと誓った。そのことを先生がお知りになり反省の色濃いということで謹慎を解いて頂いたのだ」

「先生は納屋さんが本当に謹慎しているか見に行ってそのことを知られたのですか?」

「三中の先生はそのようなスパイの真似事などなさるようなお方ではない。山村先生は謹慎中学業が遅れないかとご心配になり毎日勉強しているかと訪ねてくださったのだ。生徒思いの本当にいい先生ばかりだった。先生方だけでなく同級生もいい人間ばかり だった。五年間の学業を終え卒業式を迎えたが別れたくないと男泣きした人間も大勢いた。卒業した年の名をとって十八会というのを作り、毎年集まりを持っているが、十八会に時々出席している。軍事教練、勤労奉仕、それに昭和十五年からはじまった校舎の改築工事で静かに勉強出来る環境ではなくなった。が、それだけに紐帯は強まった。私は三中、教えをうけた先生、戦時下という厳しい時代に苦楽を共にした級友に大いなる誇りを持っている。京都のよさを世界に発信したいという理想を掲げて私は戦後、淡交

社を創業した。自分でいうのは何だが、淡交社は優良企業と多くの人々から高い評価を得ている。三中の先生によくやった、さすが三中の卒業生と褒めて頂きたいと思って精進に努めたからだと私は思っている。繰り返しいうが三中は本当にいい学校だった」

納屋さんはしみじみした口調で話を締めくくられた。

二時間近いインタビューを終え淡交社を出た佐藤が高柳にポツリといった。

「納屋さんて本当に大きなお方ですね」

高柳も大きくうなづいた。

卒業して既に半世紀以上経った母校を、本当にいい学校だったと語る納屋さんを二人の後輩は誇りに思ったようだった。

立派な人を立派と思う素直さが彼女たちにはあったのである。そしてそれこそが三中・山城高と受け継がれる伝統だった。

納屋氏は

平成十六年秋、急逝された。